

課題図書①「自己表現をどう指導するか」『英語記号づけ入門』（三友社出版、第2章）

準研究員 寺田義弘（茨城）

1. 印象に残ったところ

「このように日本語で書かせることは、外国語学習の基礎を形成する。日本語ですら書けないことを英語で表現できるはずがないのである。しかし私は、「日本語で書かせる」ことにはもうひとつ大きな意味があると思う。それは「書く」ことを通じて生徒は自分の思考を練り直し、改めて自分や他人を見つめ直す機会を与えられるし、教師も生徒の作文を通じて今まで自分の知らなかった新しい生徒像を発見し、これまでの自分の指導のあり方を改めて問い直されるからである。」「自己表現をどう指導するか」『英語記号づけ入門』（三友社出版の第2章、第3節）より

2. 理由

理由は3つある。1つは「書く」ことを通じて自分の思考を練り直すという指摘は、自分自身が日常的に痛感していることであること。「年に1本は実践報告を書く。」これを教員4年目からほとんど毎年続けている。実は1年目は初任研で書いているから、教員になってからはほぼ毎年続けていることになる。書き始めはいつも頭の中でほんど形になっていない状態なので、少し書いては訂正したり削除したりの繰り返しが多いし全く進まないこともある。しかし、しばらくすると不思議と書くことのアイディアがいくつか浮かんでくる。それを先にメモがわりに書くことが多い。ワープロはそれらを貼ったり移動させたりするのが簡単にできるので思いつきで書き始めても全く問題ないのが良い。すると頭の中がかなり整理されていくのを感じる。とにかく頭の中のを吐き出すと、頭の中にその分のスペースができて整理整頓が進むような気がする。書けるときは一気にとにかく書いてみる。実際にはその後何度も読み返して書き直すのだが、その過程が自分の考えをまとめる良いきっかけとなっている気がする。2つ目は「自分を見つめ直す」機会を与えてくれるという点。書いているうちに自分の本当の気持ちに気がつくこともある。なぜそう思うのかをピッタリの言葉で表そうと思うと結構難しく、適当な言葉を探して書いているうちに、実は全く思ってもみなかったことに気がつくことがある。例えば自分の授業がマンネリしてしまい自分自身で飽きてやる気が実はなくなっていた時、実践報告を書いているうちに、それは結局自分の英語力が足りなくて他人の能力に嫉妬していただけであることに気がついたことがあった。正確に言うとそういう別の考えに変わっていったと言うべきかもしれない。「本当の気持ちに気づく」というより「別の考え方ができるようになる。」ということなのかもしれない。（実はこれも今書いていて意見が変わってしまったことなのだ。）3つ目は「他人を見つめ直す」機会を与えてくれるというもの。自分ばかりでなく、他人のことを文章で表す場合も同じである。どんな点について書くかを考える時やそれを表現する適当な言葉を探すという行為は、それまで気がついていなかった多くのことを教えてくれる気がする。あるいは別の視点を与えてくれる機会になると感じている。

3. 疑問

「書けない」理由は「書くことがない」という訳ではないのかもしれない。よく日本人は自分の意見を持たないと言われるが、果たして本当だろうか。自分の意見を持っていないのではなく、言葉で表現する方法を学んでいないだけなのかもしれない。どんな社会問題に対しても、それを理解さえできれば「手引き」を与えれば案外書き始まり「意見」らしいものは出てくるのではないだろうか。（実際には理解することさえ放棄しがちなのだが。。）